

フランス・ヴァンスの「フレネ学校」における 教育実践に関する一考察

— 教育の継承に着目して —

坂 本 明 美

山形大学 教職・教育実践研究 第12号別刷

平成 29 年 3 月

フランス・ヴァンスの「フレネ学校」における 教育実践に関する一考察

—教育の継承に着目して—

坂 本 明 美¹⁾

南フランス・ヴァンスの「フレネ学校」では、フランスの教育者セレスタン・フレネ (Célestin FREINET: 1896～1966) と妻のエリーズ (Elise FREINET: 1898～1983) が築いた教育の継承が、同校の重要な使命として捉えられている。フレネ学校では、近年、教師たちの世代交代や異動が激しいが、教師の養成にも力を入れ、教育実践を継承しようと努めている。本稿では、筆者が2012年3月に同校で観察した内容を中心に、2007年3月の観察内容との比較も行いながら、教育の継承、及び、異学年学級 (異年齢学級) の実践として、「支援」のペアと、座席の配置に焦点を当てて考察する。

キーワード：フレネ教育，異学年学級，異年齢学級，フレネ技術，学習材

問題の所在と先行研究

(1) 問題の所在

本稿で扱う「フレネ学校」は、南フランスの「ヴァンスのフレネ学校 (l'École Freinet de Vence)」である [以下、「フレネ学校」とする。なお、[] は坂本による註を示す]。ヴァンス郊外の丘の上にあり、教育者セレスタン・フレネが、1935年に公式に開校を宣言した学校である。現在も公立学校として存続している。同校は、幼児クラスが1クラス、小学生クラスが2クラス、合計3クラスで構成されており、3クラスとも異学年・異年齢の子どもたちで構成されている¹⁾。

筆者が初めてフレネ学校を訪問したのは、学部学生時代の1989年 (平成元年) 11月上旬から12月上旬まで、一ヶ月余り滞在してであった。手元にある記録を見ると、この第1回目の訪問以来、2012年3月まで、同校を合計9回訪問した。日本の「フレネ教育研究会」主催の「フレネ教育法研修旅行」に、通訳補助と案内のため、1993 (H5) 年、1994 (H6) 年、1995 (H7) 年、1997 (H9) 年、1999 (H11) 年、2000 (H12) 年の春に同行した。その後、2007 (H19) 年3月に、科研費 (若手研究 (スタートアップ)) (課題番号: 18830011, 研究課題名: フランスにおける「フレネ技術」を導入した異年齢学級と、日本の複式学級との比較) の調査のために、合計6日間の観察を行なった。そして、2012 (H24) 年3月には、科研費 (基盤研究 (C))

(課題番号: 23530980, 研究課題名: フランスのフレネ教育における〈自尊感情〉と〈他者へのかかわり〉) の調査のために、合計6日間の観察を行なった。[観察した日数は、フレネ学校がお休みの水・土・日を除き、実際に訪問した合計日数である。]

フレネは、教師による画一的な知識注入型の教育を批判し、公立学校の改革を目指して、子どもを主体とした教育の在り方を追究した。「フレネ教育 (la Pédagogie Freinet)」は、フレネの名前が付された名称になってはいるが、フレネが一人で築き上げた教育ではなく、彼の追究する教育の在り方に賛同する教師たちを中心とした、協同的な教育運動として展開されてきたものである。フレネは、教師を中心とした教育運動を展開しながら、「学校印刷」、「自由テキスト」、「学校新聞 [学校文集]」、「学校間通信」、「コンフェランス (自由研究の発表)」、「仕事の計画」などをはじめとする「フレネ技術 (les Techniques Freinet)」を形成していった。また、子どもの学びのためのテーマ別資料や、一人ひとりがそれぞれの学習リズムに応じて学習を行うための、個別学習のためのカードなど、さまざまな「学習材」の開発と製作にも取り組んだ。これらの「フレネ技術」と「学習材」が柱となり、「フレネ教育」を支えている。さらに、フレネは「学校共同体 (la communauté scolaire)」を構想し、子どもたちの自治組織である「学校協同組合」の実践にも取り組んだ。フレネらが展開した教育運動は、

1) 山形大学 地域教育文化学部

やがて「現代学校運動 (le Mouvement de l'École moderne)」と呼ばれ、今日に至っている²。

「フレネ学校」には、長年勤務し続けた三人の女性教師たちがいる。カルメン・モンテス (Carmen MONTÈS) 、ブリジット・コネニー (Brigitte KONECNY) 、ミレイユ・ルナール (Mireille RENARD) である。カルメンは、北フランスでシモーヌ・サンス (Simone SENCE)³ という教師に養成され、セレスタン・フレネの妻、エリーズ・フレネによって 1975 年にフレネ学校に任命された。フレネの娘、マドレーヌ・バンス＝フレネ (Madeleine BENS-FREINET: 1929～2007) の要請により、1981 年にフレネ学校の校長となる。カルメンは、学級担任の仕事に加えて、フレネ学校の校長を、退職する 2009 年まで兼務する。ブリジットも、北フランスのシモーヌ・サンスによって養成され、エリーズ・フレネによって 1978 年にフレネ学校に任命された。カルメンとブリジットは、エリーズが亡くなる 1983 年まで、エリーズによって養成される。そして、フレネの娘、マドレーヌ [=バンス (BENS) 夫人] が亡くなる 2007 年まで、二人ともマドレーヌ [バンス夫人] と信頼関係を保ちながら働いてきた。カルメンとブリジットは、2009 年に同時に同校を退職した。ミレイユは 1984 年にカルメンによって採用されて以来、長年にわたり同校の幼児クラスを担当してきた⁴。筆者の 2012 年 3 月訪問時、ミレイユは、前年度の年長児たちとともに持ち上がり、教職最後の年となるこの時、小学校低学年クラス [一部、3 年生も含む] の担任となっていた。そして、2012 年 6 月で退職を迎えようとするところだった。

「フレネ学校」で長年働いてきた教師たちの退職により、同校は大きな節目を迎えたと言ってよいだろう。ちょうどその過渡期に相当する 2012 年 3 月に、筆者は「フレネ学校」を訪問した。2012 年 3 月は、カルメンとブリジットの退職後で、新しく着任した女性教師メラニーが、幼児クラス担任と校長とを兼務していた。さらに、メラニーとともに新しく着任していた女性教師アヴリルが 2011 年 12 月に出産したため、代替教員エミリーが、2011 年 9 月～2012 年 6 月の一学年度、中・高学年クラスの担任を受け持っていた。このような過渡期ともいえる「フレネ学校」の教育実践をみていくことによって、同校の特徴、独自性が現れてくるのではないだろうか。

そこで、本稿では、筆者が 2012 年 3 月にヴァンスの「フレネ学校」を訪問した時の様子を中心に上げ、主に次の三点に焦点を当てて考察を行いたい。

1. ヴァンスの「フレネ学校」では、同校の使命について、どのように捉えているのか。
2. 担任教師の世代交代と異動があるなかで、「フレネ教育」の実践は継承されているのか。また、2007 年 3 月時点の筆者の同校についての捉え方に、変化があるのかどうか。
3. 筆者が、2007 年 3 月のフレネ学校における観察で初めて発見したことがあった。それは、フレネ学校の異学年 (異年齢) 学級の特徴として、二つの仕掛けがあるということだった。一つは「支援」のペアであり、もう一つは座席の配置である。この異学年学級の「支援」のペアと座席の配置については、2012 年 3 月にはどのように実践されているのか。特に、ミレイユが担任する低学年クラスに焦点を当てて考察したい。

以上の三つの課題を設定し、2007 年 3 月に同校で観察した内容と比較しながら考察する。

なお、本稿で度々扱う資料について説明しておく。筆者が 2012 年 3 月にフレネ学校を訪問した際に、メラニー校長 [幼児クラス担任教師でもある] から、『ヴァンスのフレネ学校 ～協約と憲章～』というタイトルの資料を入手した。各ページの上部のヘッダーに、「ヴァンスのフレネ学校, 06140, 2009 年 7 月 13 日 / 2010 年 5 月 7 日, ニース大学区視学局」と記されている。表紙のタイトルの下には、小さな文字で次のような説明が書かれている。

「マドレーヌ・フレネ [=セレスタン・フレネの娘、バンス夫人] とフレネ学校在職の教育チーム (カルメン・モンテス, ブリジット・コネニー, ミレイユ・ルナール) によって、1991 年に作成された資料。(2001 年に実施され、2007 年にニース大学区視学官によって、新しい状況に適応され、法律上有効にされた資料)」

同じ表紙の中央部に、次のように記載されている。

「フレネ学校の教員会議による起草, 2009 年 10 月 29 日, カルメン・モンテス《校長》, ブリジット・コネニー, ミレイユ・ルナール & メラニー・セール《新校長》, アヴリル・フェルナンドゥ＝ルヴェスク
ニース大学区視学局における実施, 2010 年 5 月 7 日, サンドリーヌ・アダム《大学区視学官の補佐視学官》, カルメン・モンテス《フレネ学校校長》, アンリ・ルイ・ゴー《フレネ学校学術コーディネーター》」

この『ヴァンスのフレネ学校 ～協約と憲章～』の資料は、p. 1 が表紙で、次のような二部構成になっている。本稿では、出典をそれぞれ【A】、【B】と示す。○ pp. 2～6. は、「三者間協約 (CONVENTION TRIPARTITE)」→資料【A】とする。

○pp. 7～18. は、p. 7 が表紙で、「働きの憲章 (LA CHARTE DE FONCTIONNEMENT)」→資料【B】とする。

p. 2 に「三者間協約」の「三者」が以下のように記載されており、p. 6 にはその三名の署名がある。

○アルプ＝マリティム [県] の大学区視学局、代表フィリップ・ジョーダン—大学区視学官—国民教育省県部局長、○フレネ学校、代表メラニー・セール—ヴァンスのフレネ学校校長、○CREAD と LISEC—ローヌヌ研究所、代表アンリ・ルイ・ゴ—ヴァンスのフレネ学校の学術コーディネーター

(2) 先行研究の検討

我が国の先行研究として、若狭は、彼自身がフレネの娘、バンス夫人 [=マドレーヌ・フレネ] との間で、手紙と FAX で直接やりとりを行なった内容を中心として、新聞記事、フレネ学校と「文部大臣」や行政当局とのやりとりの内容など、貴重な資料に基づき、「1991年のフレネ学校」という論稿を執筆している(若狭 1992: 53-67)。この論稿の中で、若狭は、1989年12月15日にバンス夫人がフレネ学校の保護者たちに学校閉鎖を通告した時から、1991年にフレネ学校が国立の学校として出発した直後までのプロセスについて、詳細に記述している。同論稿の冒頭において若狭は、「1990年から91年にかけてフランスのフレネ学校が公立学校へ移行する過程で何を主張して闘ったかを調べることで、公立学校が本来備えるべきものは何かを考えてみたい」と記している。そして、同校が、「公立学校となることで剥ぎとられたり、つけ加えられたりしてはならないものとは何なのか、その独自性にこそ本来学校が生命とすべきものがあるのではないであろうか」と述べている(若狭 1992: 53)。

また、堀内は、「*Historique de l'école, l'Institut Freinet l'Ecole Vence* のホームページ」を資料として、「フレネ学校のこれまでと校長の交替」について記述し、同校の教師たちへのインタビューの内容を掲載している(堀内 2010: 42-44)。その中で、フレネ学校の教師たちの次のような回答を紹介している(堀内 2010: 43)。

「メラニは、2年前からカルメンとブリジットから指導を受けて本校で働いている。カルメンとブリジットは月9回ほど学校に来ており、カルメンはメラニと共同で授業 (classe) も行ってきた。個性的な面の違いは別として、メラニはこれまでのフレネ教育と同じ授業を編成している。」

しかし、フレネ学校における「教育の継承」、フレ

ネ学校の「使命」について、同校がどのように捉えてきているのかということを直接扱った研究は、管見の限り見当たらない。さらに、小学生クラスの座席の配置に焦点を当てて「異年齢学級」(異学年学級)について考察した研究は、坂本の拙稿(坂本 2008: 54-59)以外に出会っていない。

1. ヴァンスの「フレネ学校」の歴史

第一次世界大戦に従軍して負傷し、反戦の思いを強く胸に抱いて帰還したフレネは、1920年、南フランスの山々に囲まれたル・バール＝スール＝ルー (Le Bar-sur-Loup) という寒村の公立学校に教師として赴任する。フレネは、当時盛んだった世界の新教育運動のさまざまな新しい教育の要素を吸収しながらも、「ブルジョアの」教育を批判的に捉え、「ブルジョアの」教育理論や教育実践から、「プロレタリアの」学校へ摂取できる要素を抽出し、独自に組み換えながら応用し、実践しようとしていた。フレネは、彼の考えに賛同する教師たちを中心として、協同的な教育運動を展開しながら、公立学校の改革を目指した。しかしながら、サン＝ポール (Saint-Paul) の公立学校に勤務していた時、フレネの教育実践を批判する圧力によって、いわゆる「サン・ポール事件」(1932-1933)が起こる。バレによると、フレネは1933年春に三ヶ月間休職し、同年6月21日に、前任地のル・バール＝スール＝ルーへの異動が言い渡される。しかし、フレネは同年7月29日に前任地の学校で授業をしたものの、前任地のポストには就かず、再び休職する(BARRÉ 1995: 95-100)。そして、1934年に公教育から退くが、バレも記述しているように、「反動的な攻撃的態度へのこの反抗は、フランスの公立学校の改革という、彼の主たる目標を変更するものではなかった」(BARRÉ 1988: 15)ということを見落としてはならない。

一方、バレ (BARRÉ 1995: 98-100, 123-125) とゴ— (GO 2015: 50) によると、エリーズとフレネは、1933年に「新しい学校」を築くことを決めていた。1934～1935年に、ヴァンス郊外、ピウリエ (Pioulieu) の丘の上に、学校が少しずつ出来上がっていった。

フレネらの教育運動の機関紙『プロレタリア教育者』1935年6月10日号(第18号)に挟み込まれた付録は、4頁で構成されており、「ヴァンスのフレネ学校」というタイトルでフレネが執筆したものである。この付録の論稿 [パンフレット] において、フレネは、フレネ学校の「1935年10月1日」の開校を宣言しており (FREINET C. 1935: 4)、同校における教育を「ポリ

テクニク（polytechnique）」と「共同体の（communautaire）」という二つの形容詞で表現していた（FREINET C. 1935: 3）。後者の、「私たちの教育は共同体的なものとなるだろう」ということについて、フレネは次のように記述している。

「フレネ学校は子どもたちの領域となるだろう。そこでは、すべてが子どもたちのために研究され実現される。私たちに預けられる児童・生徒たちの理想的な社会的育成が生まれると思われるのは、子どもたち同士、また、子どもたちと大人たちとの間の幸せな協同（coopération）からである。」（FREINET C. 1935: 3）

なお、ゴー（GO 2015: 50）によれば、学校は実際には 1934 年 10 月に開校してはいたが、バレ（BARRÉ 1995: 123-133）とゴー（GO 2015: 50）が記述しているように、1936 年 7 月にしか政府の許可を得ることができなかった。

私立学校としてスタートしたヴァンスの「フレネ学校」は、次のように変遷しながら、現在、アルプ・マリタイム県の公立学校として存続している。以下、2009 年までの同校の状況について、資料【A】（p. 5）を主な資料として記述する。堀内（堀内 2010: 42）も指摘しているように、1964 年から、ヴァンスのフレネ学校は「実験学校」の身分を享受し、資料【B】（p. 12）には、同年（1964 年）、「国民教育省が教師たちに給与を支払う」と記述されている。1991 年から、ヴァンスのフレネ学校は、大学区視学官の直接的管轄下で、国立学校になった。同年、児童数が 66 名に限定される。2007 年から、フレネ学校は県の公立学校になった。2009 年から、実験学校であるフレネ学校は、アルプ・マリタイム〔県〕の大学区視学官の管轄のもと、ヴァンスの行政区に属し、学校評議会は通常のやり方で機能している。なお、資料【B】（p. 13）にも記述されているように、2001 年 7 月、「フレネ学校」は「20 世紀の遺産」に登録されている。

2. 「フレネ学校」における教育の継承

（1）「フレネ学校」が追究していること

資料【A】の中に、「学校の教育方針」という見出しが付いた項目があり、さらに「ヴァンスのフレネ学校の契約〔約束（Engagement）〕」という小見出しが付いている項目がある。ここには次の六つの内容が掲げられている。

「1. 子どもに、学習において自律し責任を持つようになることを教える。そこでは、子どもが、自分の学習の組織化、実行、評価の責任を有効に引き受ける。

2. 知識をわが物とし、自身の創造性を伸ばすことを子どもに教える。好奇心と探究心の発達、学ぶことと創造することに対する関心（goût）が増していくこと。
3. 学習リズム、すべての子どもたちに刺激を与えることを考慮に入れる。落第が無いこと、挫折の状態が無いこと。
4. 子どもを、協同的で連帯した共同体のただなかで社会的生活の主役にする。
5. 生（la vie）、身体的・精神的バランス、知的好奇心、批判精神に向けて学校を開く。
6. 家庭と学校との間の教育的連続性、教育行為における一貫性、子どもの動機づけの強化、熱狂的な学校教育、これらを保証する。」【A】（pp. 2-3）

以上の六つのなかで、4. に関する説明の中で、後述する「支援」についても言及されている。

「一人ひとりの体験の共有は、自由な表現、コミュニケーション、グループ学習、子どもたちの間の支援〔のペア〕、学校文集〔学校新聞〕（『ピオニエ（*Les Pionniers*）』）の製作、学校〔間〕通信によって奨励される。」〔下線部は原文でイタリック体で強調されている。〕（p. 3）

（2）「フレネ学校」の使命

『ヴァンスのフレネ学校 ～協約と憲章～』には、フレネ学校の「使命」について記述された箇所が複数ある。それらを一言で表現するならば、フレネとエリーズが望んだ教育（学）・教育実践を守り、継承し、教師たちにとって基準となる教育実践を示す学校であり続けること、と言えるだろう。資料からいくつか拾い上げてみると、次のような記述がある。

資料【B】の「序文」は、次のような書き出しである。

「『フレネ教育（《*pédagogie Freinet*》）』という熟語が非常に多様な実践を指し示し、さまざまな解釈を引き起こす時にあって、エリーズとセレスタン・フレネによって開校された学校は、基準にする（référence）学校のままでいなければならない。この特殊な学校は、独自の教育、即ち、フレネとエリーズ・フレネが、自分たち自身の学校において望んだ教育を実践する。」

【B】（p. 8）〔下線部は、原文で太字・イタリック体で強調されている。〕

この文章に続いて、次のように記述されている。

「エリーズ・フレネは、カルメン・モンテス（1975）とブリジット・コネニー（1978）を自分自身で採用し、彼女たちにヴァンスで、フレネの哲学と、この学校で実践された教育技術の総体とを保護するように求めながら、養成した。このチームは、この同じ使命（mission）

のために、1984年にミレイユ・ルナールを採用した(2012年まで常在職)。」【B】(p.8)

そして、資料【B】の同じページには、*vocation* というフランス語で、次のようにも記述されている。
「*vocation* というフランス語には、*mission* と同じく「使命」という意味もあるため、ここでも「使命」と翻訳する。」

「学校には、次のような使命 (*vocation*) がある。

- ・エリーズとセレスタン・フレネによって取りかかれた仕事を、子どもたちのそばで続けること。それは、『自然と人間の共同体のただなかで、同じ教育行為において、生きる権利と知識への権利とを両立させること』である。

- ・この独自の教育に興味を持って世界中からやって来るすべての人々のために、歴史的・文化的場所であること

- ・教師たちに、実践的・理論的養成を保証すること
- ・哲学と教育科学の研究に参加すること」【B】(p.8)

また、資料【A】には次のようにも記述されている。

「ヴァンスのフレネ学校で実践されている教育 (*La pédagogie*) は、『実験的 (*expérimentale*) 』のようなものではない。フレネは1920～1930年の間に彼の教育技術の構想を思いついた。そして、ヴァンスの学校の創立以来、同校は次のような二重の使命 (*mission*) を受けた。即ち、何も教育行為の行使を妨げない場所であること、この行為の深化の探究が自由に繰り広げられ得る場所であること、である。

在職チームとともに、カルメン・モンテス校長は、彼女の学校着任以来、実践において、エリーズとセレスタン・フレネによって構想された本質的な実践を、可能な限り最も良い状態で維持しようと努めた。今日、カルメン・モンテスの監督のもとで、学校はこの保護 (*préservation*) を、一つの研究活動において関連づけようと努力している。この活動は、レンヌ第二大学とナンシー第二大学と提携して行われる。」【A】(p.4)

以上のように、フレネ学校の「使命」に関する複数の記述が、資料【A】と【B】の中に盛り込まれている。

また、1991年にフレネ学校が国立学校になった時のことを特筆しておきたい。資料【B】によると、フレネ学校が財政的困難に陥った時、フレネの娘、マドレーヌ・フレネは、当時のリオネル・ジョスパン国民教育大臣に学校を買い戻すように説得した。そして、フレネ学校は、ニース大学区視学官の監督のもと、(実験的な身分で) 国立学校になった。この時のことについて、資料【B】には次のように記述されている。

「次のことがはっきりと述べられている。それは、学校の使命 (*la vocation*) は、エリーズとセレスタン・フレネによって、ここに願われた教育学 (*la pédagogie*) を保護することである、ということである。」[下線部は原文で太字・イタリック体で強調されている。] 【B】(p.13)

また、この内容と関連して、資料【A】(p.5)には、次のような1991年4月17日付けの国民教育大臣からの書簡が、部分的に抜粋・引用されている。

「《これらのクラスの教育と行政の責任は、大学区視学官、国民教育省アルプ＝マリティム県部局長によって保証されます。これは、良好な教育機能、及び、セレスタン・フレネによって編み出された方法に基づく教育の永続性 (*la pérennité*) に留意するでしょう。》」

このように、1991年にフレネ学校が国立学校になる際に、ただ学校が存続することだけが求められたのではなく、フレネが築いた教育・教育実践の「永続性」が保証されるかどうか、ということが鍵となっていたことは、同校の歴史において非常に重要であろう。

3. 「フレネ学校」の担任教師と子どもの人数

ヴァンスの「フレネ学校」は全部で3クラスある。2007年3月は、次のような担任教師の構成だった。[以下、姓は省略し、名前のみ表示する。]

◆幼児クラス：ミレイユとマリー＝ポール(補助教員)

◆小学校低学年クラス：ブリジット

◆小学校中・高学年クラス：カルメン(校長兼務)

2012年3月は、次のような構成であった。

◆幼児クラス：メラニー(校長兼務)とマリー＝ポール(補助教員)

◆小学校低学年クラス[一部3年生含む]：ミレイユ

◆小学校中・高学年クラス：エミリー[臨時教員]

資料【A】には、次のように記述されている。

「このチームによって成し遂げられた仕事を永続させるために、これらの三つのポストに関する任命の条件を明確にする必要があった。フレネ学校のポストの任命へのすべての立候補は、在職チームとともに、事前の養成 (*une formation*) を前提とする。」【A】(p.5)

このように、フレネ学校で働く教師たちは、フレネ学校における研修を通して養成される。資料【B】には、メラニーとアヴリルは、2006年から2009年の間にフレネ学校で養成された、と記述されている(p.8)。一方、堀内(堀内2010:42)も記述しているが、筆者[坂本]の2012年3月の訪問時、坂本自身がメラニーにインタビューした内容によると、[個人情報に係る内容

はここでは省略するが、]フレネ学校に採用される前、2年間、毎週金曜日に丸一日、同校のブリジットのクラス（小学校低学年クラス）で研修を受けたという。

ところで、退職したカルメンとブリジットは、退職後も次のような形で、フレネ学校における教育の継承のために貢献している。

「大学区視学局の同意のもと、カルメン・モンテスとブリジット・コネニーは、レンヌ第二大学のCREAD研究所とナンシー第二大学のLISEC研究所とのつながりのもと、新たに着任した教師たちに助言し、この学校の独自の使命(*la vocation*)によって必要とされる歴史的継続性を保障するために、定期的に来校し続ける。」⁵

実際に、2012年3月に筆者が訪問した時にも、カルメンとブリジットが同校に来校された日があった。

フレネ学校の全校の子どもの人数は、2007年3月訪問時も2012年3月訪問時も、どちらも66名だった。そのクラスごとの内訳は次の通りである。

【2007年3月訪問時】

○幼児クラス：合計26名。年少（3～4歳）→8名、年中（4～5歳）→9名、年長（5～6歳）→9名。

○小学校低学年クラス：合計20名。小1→8名、小2→12名。

○小学校中・高学年クラス：合計20名。小3→8名、小4→5名(?)、小5→7名(?)。

【2012年3月訪問時】

○幼児クラス：合計25名。年少（3～4歳）→7名、年中（4～5歳）→9名、年長（5～6歳）→9名。

○小学校低学年クラス[一部、3年生を含む]：合計20名。小1→8名、小2→8名、小3→4名。

○小学校中・高学年クラス：合計21名。小3→4名、小4→10名、小5→7名。

4. 2012年3月に筆者が捉えた教育実践の継承

2012年3月の筆者の訪問時に、「フレネ技術」と呼ばれる諸技術の一つ一つがどのように実践されていたかということについては、紙幅の都合上、記述できないが、「フレネ技術」と学習材に基づいた「フレネ教育」の実践は、2007年3月訪問時から、さらにはそれ以前の訪問時から継承されていた。

そもそも、筆者がフレネ学校を初めて訪問した1989年11～12月から、2012年3月訪問時までの期間において、同校の教育実践について捉えてみた場合、小学生のクラスにおいてパソコンが導入された、という変化はあった。1989年11～12月の時点では、すべての

クラスで「自由テキスト (*le texte libre*)」⁶の印刷は活字を拾って印刷機で印刷していた。しかし、中・高学年クラスは、以下のことから1995年4月～1996年3月の間にパソコンが導入されたことが推測できる。長谷川は、1995年に続き、1996年3月が2回目のフレネ学校訪問であり、1996年3月のカルメン学級（中・高学年クラス）の参観についての記述の中で、「パソコンが3台、ビデオデッキが1台」導入されていたことを報告し、「コンピューターが入ったことで子ども達は1週間の研修に行ってきたそうである」と述べている。そして、子どもたちがコンピューターを使って学習している写真を掲載している（長谷川 1996: 54-56）。この1996年3月に筆者は同行していなかったが、実際に、フレネ学校の「学校文集[学校新聞]」の『ピオニエ (*Les Pionniers*)』1996年夏 (Été) 号では、中・高学年クラスの子どもの「自由テキスト」は、パソコンで入力されている。また、1997年3月に筆者が訪問した時の記録によると、パソコンが充実していたことが見てとれる。一方、低学年クラスは、「仕事の計画表 (*Plan de Travail*)」を見ると、2000年3月訪問時に小学校2年生用の計画表において、1999年3月訪問時の小2用の計画表にはなかった「パソコンテキスト (*PC Textes*)」という新しい項目が含まれていた。[ただし、幼児クラスでは、2012年3月も変わらず印刷機を使っていた。]しかしながら、教育実践の核となるもの、即ち、「フレネ技術」と学習材に基づく実践においては、大きな変化は見受けられないように感じた。いや、むしろ大きく変化しないように配慮し、「フレネ学校」としての教育実践を守り、継承していこうとしていることを強く感じた。

ところで、2007年3月に筆者がフレネ学校で観察した内容をもとに執筆した拙稿（坂本 2008: 56）において、次のように述べた。

「しかしながら、フレネ学校において観察を行なってみたところ、例えば小学校低学年クラスで、『読み方』の学習を、子どもたちの進度により学級を二つのグループに分けて行[な]っているなど、『異年齢学級』としての特殊性が見出される教育内容も確かにあったが、教育実践全体として、『異年齢学級』の特殊性をあまり感じることはできなかった。

むしろ、筆者の眼には、後述する《学校共同体の一員としての子ども》として映った。」

この筆者の捉え方は、教師たちの異動後の2012年3月も変わらなかった。フレネ学校での観察を通して、同校の教育実践の基盤には、一人ひとりの学習リズム、

学びのプロセス、個性はそれぞれ異なる、という考え方があり、異質性と多様性に基づいた教育が営まれていることを実感した。そのため、同校には一人ひとりの学習リズムに対応する学習材、子どもたちの興味・関心にすぐに応えられる学習材も備わっている。さらに、一人ひとりがそれぞれのペースで目標を設定しながら学習の自主運営を行い、クラスで相互評価し合う「仕事の計画（表）」が重要な役割を果たしている。2007年3月の観察内容に基づいた拙稿（坂本 2008:56）においても、筆者は「異質性と多様性に基づいた教育」と記述しており、この点についても、同校の実践についての筆者の捉え方に変わりはない。また、2007年、2012年のどちらの観察を通して、「自由テキスト」、「コンフェランス［自由研究の発表］」、「学校協同組合」など、「フレネ技術」と呼ばれる諸技術による実践が、「学校共同体」の形成につながっていると感じた。

5. 異学年学級（異年齢学級）の実践

～「支援（le parrainage）」のペアと、座席の配置～

拙稿（坂本 2008: 58-59）でも述べたように、2007年3月のフレネ学校における観察で初めて発見したことがあった。一つは「支援」のペアであり、もう一つは座席の配置である。

（1）「支援」のペア

「支援」のペアは、上学年の子どもが下学年の子どもを支援してあげるものである。フレネ学校における「支援」と呼ばれる実践は、各クラスにおける「支援」のペアと、幼児クラスの子どもたちの支援をするための、学校全体の「支援」のペア[2012年3月はグループもあった]の二種類がある。2007年10月5日にフレネ学校から筆者宛てにメールで回答をいただいた内容によると、次のように記されていた。

「《支援》のペアは以前から各クラスに存在しています。子どもたちは、通常は一年間[のペアとして]、自分たちでお互いに《選びます》。（例外的に、二人のうちの一人の求めに応じて、協同組合の会議で変えることがあります。）例えば、子どもたちが《ペア》を決めるのは、幼児クラスの年長児たちが一年生のところで（低学年クラスで）一日過ごしに来るとき、6月です。

大きい子たちによる、小さい子たちの支援[のペア]は、約10年前から、新年度の開始の日を決めています。

これ[＝支援のペア]は「フレネ技術」の一つなのか？ それは、協同的な生活の一部を成しています。」

以下、2012年3月に筆者が観察した内容について記す。幼児クラス内の「支援」のペアは、年少児と年長児のペアの名前が掲示されていた。小学校低学年クラスの「支援」は、1年生と2年生のペアが五つ、1年生と3年生のペアが三つ、2年生と3年生のペアが一つ、2年生同士のペアが一つであった。中・高学年クラスの「支援」の掲示には、7名の5年生の名前が記載されており、その一人ひとりの名前の横に「→」が記され、その子どもが支援する3年生あるいは4年生の子どもが一人ずつ記載されていた。

幼児クラスの子どもの支援するための、学校全体の「支援」については、低学年クラスと中・高学年クラスに掲示してあった一覧表では、3つのクラス[学級]からそれぞれ1名ずつ合計3名の子どもたちが一つのグループを構成している組み合わせが大半だった。そして、数名の幼児クラスの子どものについては、幼児クラスの子ども1名と中・高学年クラスの子ども1名のペア、あるいは幼児クラスの子ども1名と低学年クラスの子ども1名のペア、という組み合わせになっていた。一方、幼児クラスに掲示してあった「支援」のリストでは、3名のグループではなく、幼児クラスの子ども1名と、中・高学年クラスの子ども1名のペアが大半で、いくつかは、幼児クラスの子ども1名と低学年クラスの子ども1名のペアが記載されていた。

幼児クラスに関連していえば、「誰が誰を寝かせる」というタイトルの一覧表の掲示物もあった。そこには、お昼寝をする子どものリストがあり、年少児の一人ひとりの名前の横に、その子を寝かせる係[担当]の子の名前[低学年クラス]が記載され、その隣の欄には、係の子の都合が悪い時に代わりに担当する子どもの名前[中・高学年クラス]が記載されていた。中・高学年クラスに掲示されていた同じタイトルの一覧表では、係の子どもの名前が異なっており、担当する子どものクラスも入れ替えられていた。お昼寝の係は、ある期間が経過すると交代して担当しているようである。なお、2007年3月の訪問時も、幼児クラスの子どものお昼寝の係の一覧表は、実践に導入されていた。

（2）座席の配置

次に、座席の配置であるが、2007年3月には、小学校低学年クラスでは、「支援」のペアが隣同士に座るように配置されていた。中・高学年クラスは、8人グループの座席が三つあり、各グループに必ず5年生の子どもが入るように配慮され、各グループ内で3～5年生の三つの学年の子どもたちが混合した座席の配置となっていた。この2007年3月の座席について、拙稿

(坂本 2008) で図を掲載することができなかったため、本稿において比較を行うためにも、2007 年 3 月の小学校低学年クラス（ブリジット学級）【図 1】と小学校中・高学年クラス（カルメン学級）【図 2】の図を掲載する。

教師たちの異動後の 2012 年 3 月は、どのような座席の配置になっているのだろうか。【図 3】が、2012 年 3 月の低学年クラス（ミレイユ学級）の座席の配置である。【図 3】でも、「支援」のペアが隣同士に座るように配置されていた。しかし、教室全体の机の配置としては、2007 年 3 月の低学年クラス（ブリジット学級）【図 1】と比較すると異なっている。ただし、2007 年 3 月も 2012 年 3 月も、午前中に限定していうと、低学年クラスの子どもたちが二つのグループに分かれる場面があった。それは、一方のグループが黒板の近くに集まって座り、黒板を使って「自由テキスト」をもとにした学習を行う場面である。2012 年 3 月には、1 年生のグループと、2・3 年生のグループとで二つに分かれ、[曜日によって交代するが、] 2・3 年生のグループが黒板を使って「自由テキスト」をもとにした学習を行い、その間、1 年生のグループは個別学習に取り組む場面を観察した。2007 年 3 月には、1 年生が黒板の近くに集まって「自由テキスト」をもとに「読むこと」の学習を行う間、2 年生は、既にパソコン入力し印刷された一枚の「自由テキスト」を教師から受け取り、一人ひとりがそれを自分のノートの左側に貼り、その「自由テキスト」を見ながらノートの右側に書き写している場面を観察した。

以下、2012 年 3 月に観察した内容について記す。低学年クラス（ミレイユ学級）において筆者が観察した場面では、例えば 1 年生のある女の子が、絵本のような読み物の学習材を小さな声で読み、読み方の学習をしていた。その子の隣の座席が、彼女の「支援」のペアの 2 年生の女の子で、1 年生の女の子が読んでいる間、「支援」のペアの 2 年生の女の子は、一緒にその絵本を見ながら 1 年生の女の子の読みを聴いてあげていた。この時、2 年生の女の子は、単語を指差してあげながら、読むことの支援をしてあげていた。しかし、「支援」のペアになっていない男の子同士が、二人でソファに座って一緒に絵本を読んだり、「支援」のペアではない女の子二人が、ベンチに座って一緒に一冊の読み物の学習材の小冊子を読んだりしていた。また、「支援」のペアではない 2 年生の女の子二人が、教室の隣の小さな部屋に行って並んで座り、「自由テキスト」を書いていた。さらに、通常は、「自由テキスト」

を書きながらフランス語の綴りがよくわからない時、黒板にまず自分でその単語を書いてみて、手を挙げて教師が来るのを待ち、教師の確認を求めるが、ある女の子が黒板に綴りを書いている時、他の女の子が、黒板に書かれた単語を指差しながらやりとりをしていた。このように、異学年同士でも同学年同士でも、自然な形で協同的な学びの場面がさまざまみられた。

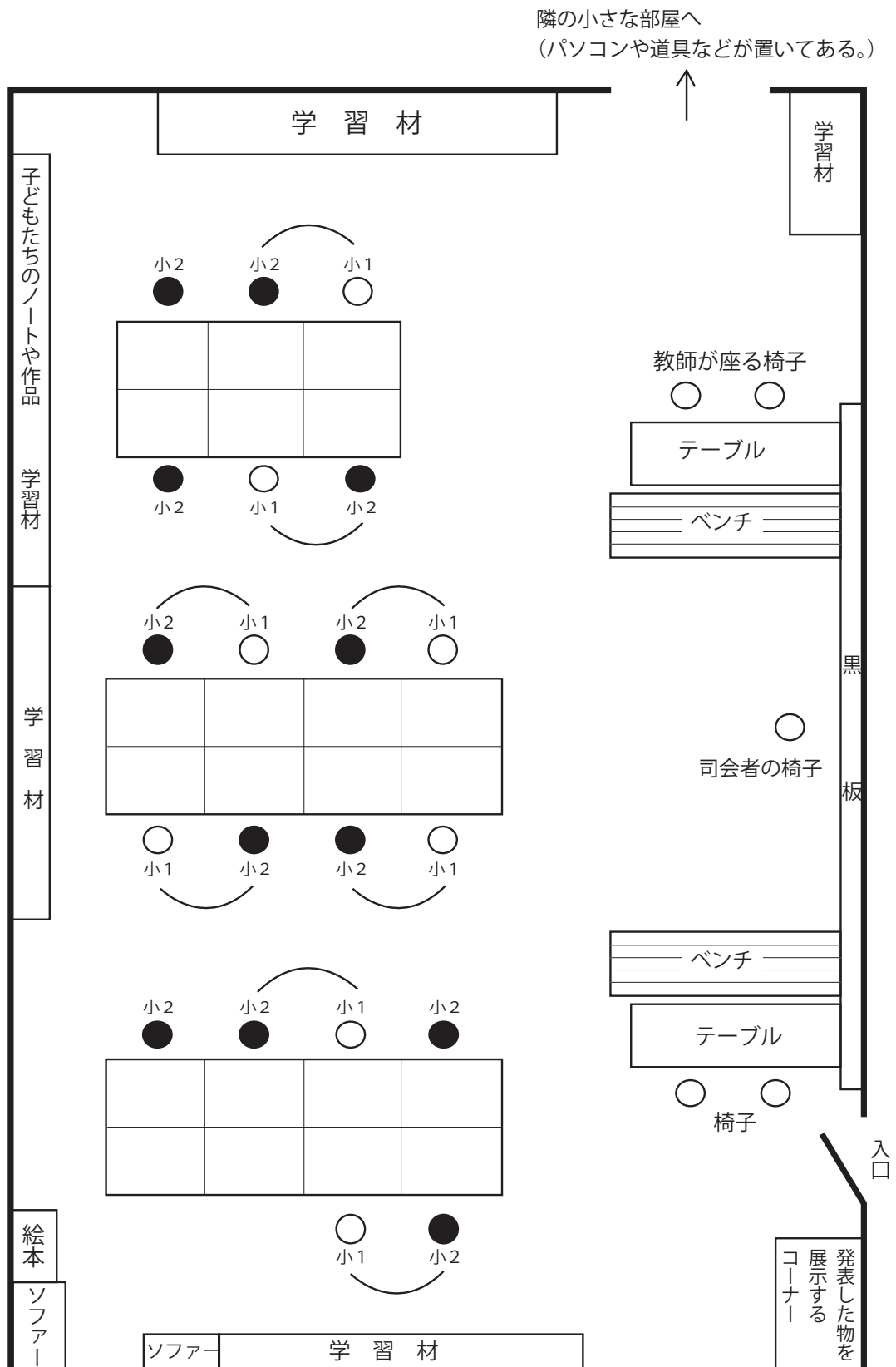
2007 年 3 月訪問時に、異年齢学級の特徴について教師たちにインタビューをした時、低学年クラス担任のブリジットは、次のように話していた。筆者のメモをもとに掻い摘んで記述する。

「子どもたちは、同年齢でも異年齢でも、お互いに常に助け合っています。また、子ども同士で互いに学び合っています。(……) 他者に教えてあげることが重要です。なぜならば、自分でしっかり理解していなければならないからです。」

また、2007 年 3 月にカルメンにインタビューした際に、カルメンは、「助けることは、特に《支援》関係になくても、日常的に行われています」と語っていた。そして、異年齢学級のメリットとして、「豊かさ」、「援助すること」、「連帯」、「助け合い」というキーワードを挙げていた。

（3）日本の複式授業との比較

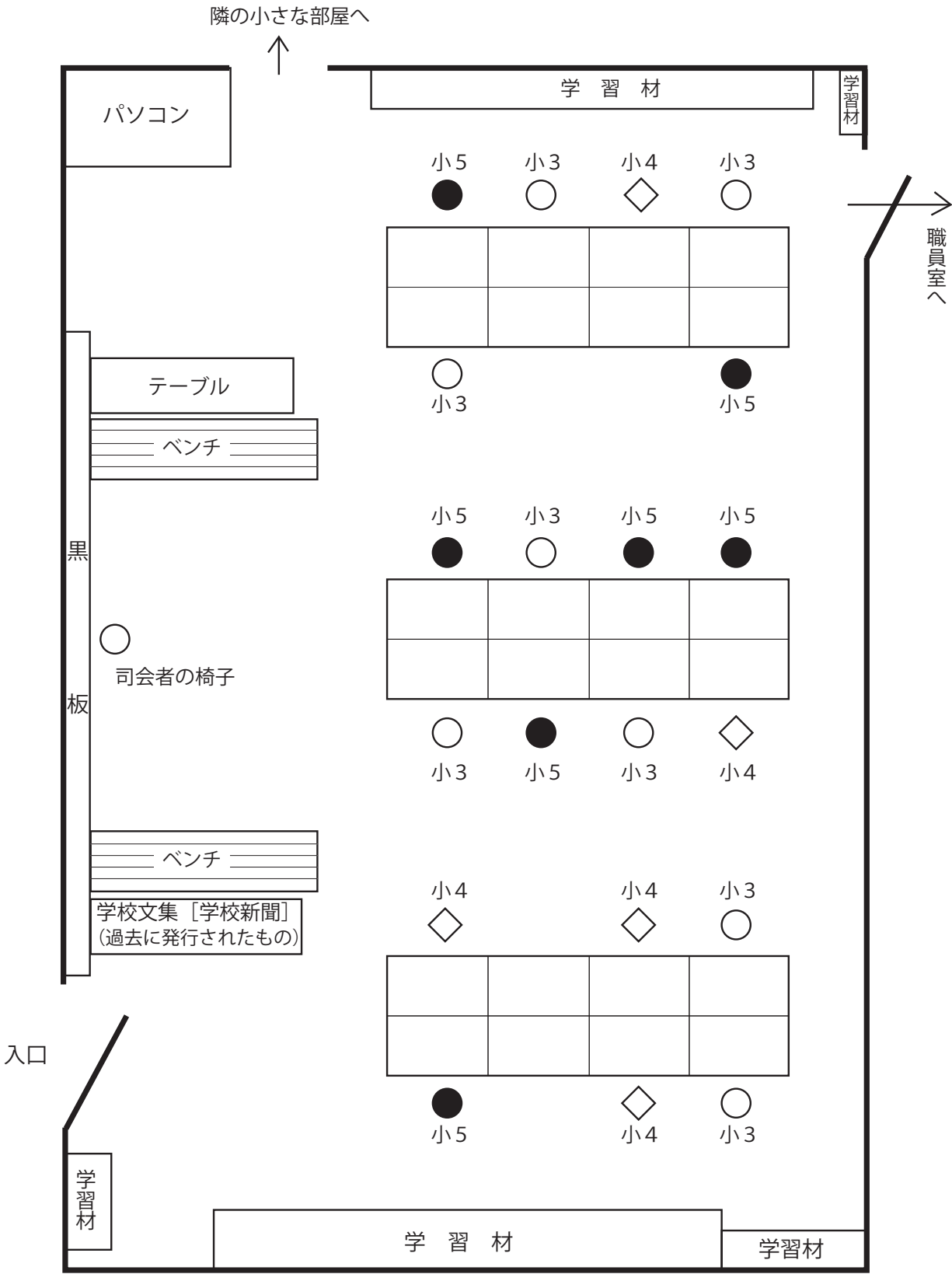
日本において「へき地」と呼ばれる地域の小規模校においては、複式学級がある。筆者が参観させていただいた小学校の複式学級の授業として、生活科、総合的な学習の時間、体育、道徳など、二つの学年が同一内容を一緒に学んでいた。また、社会科は、A 年度・B 年度にカリキュラム編成して、二つの学年が同一内容を一緒に学んでいると同った。しかし、主に国語や算数の一般的な複式授業の学年別指導では、教室空間を学年で分け、それぞれの学年の子どもたちが異なる二つの場に分離、それぞれの学年用の黒板、あるいはホワイトボードの近くに座り、異なる内容の授業が同時並行で進められている。教師はこれら二種類の授業の間で「わたり」を行ない、一方の学年を「直接指導」している間、他方の学年は「間接指導」となる。このような「わたり」、「直接指導」、「間接指導」などを含む独特な複式授業のスタイルは、我が国における「へき地・複式学級」、「少人数・複式学級」の教育遺産となっているともいえよう。このような複式授業においては、それぞれの学年における「間接指導」時の、子どもたちによる自律的な学び、協同的・協働的な学び合いが大切である。教科書や教師が作成した課題プリントなどを主な教材とし、教師がそれぞれの学



【図1】2007年3月ヴァンスのフレネ学校 低学年クラス（ブリジット学級）

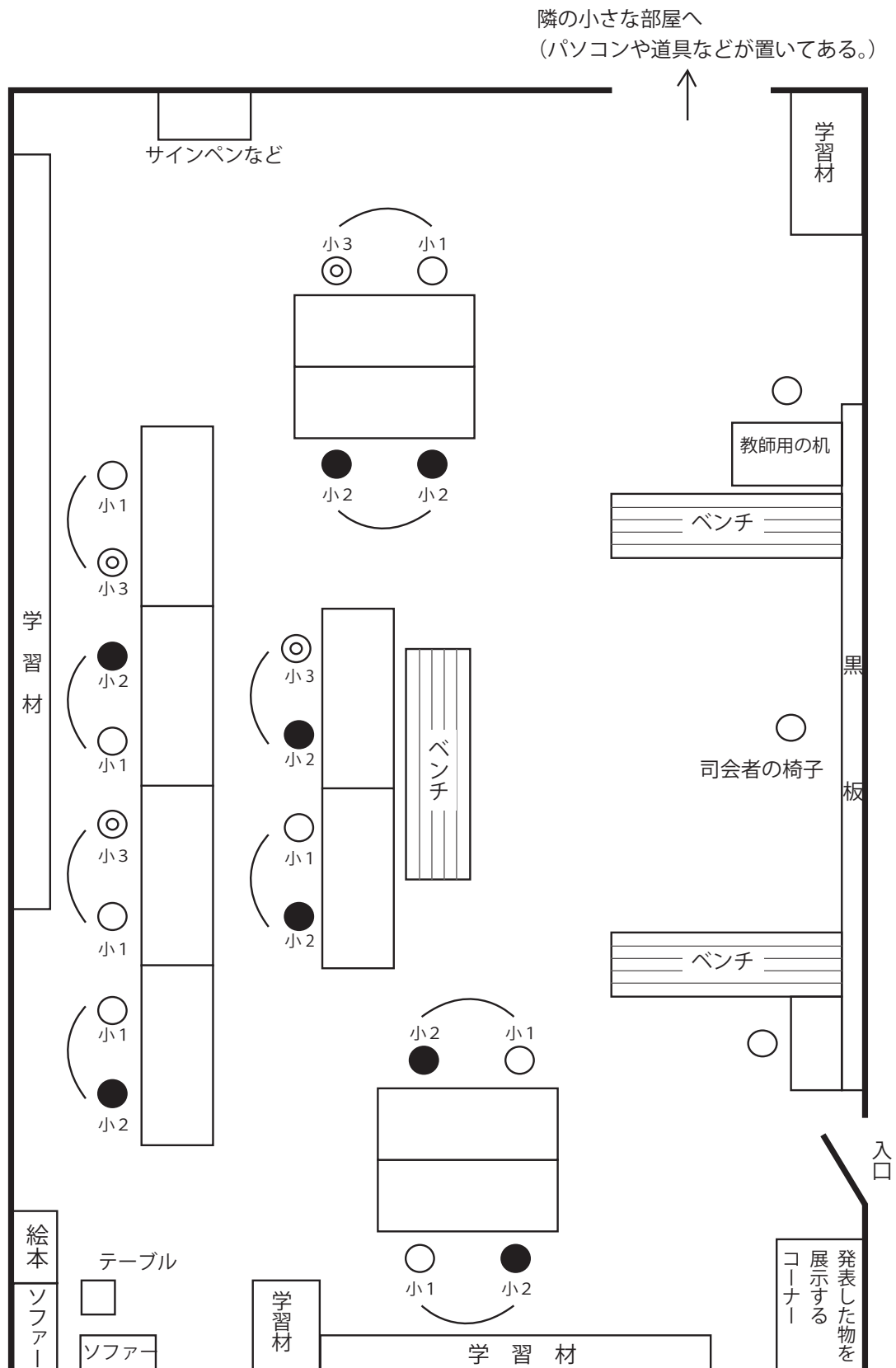
— 支援のペア（parrainage）

[作成者：坂本明美]



【図2】 2007年3月 ヴァンスのフレネ学校 中・高学年クラス（カルメン学級）

[作成者：坂本明美]



【図3】2012年3月ヴァンスのフレネ学校 低学年クラス（ミレイユ学級）

— 支援のペア (parrainage)

[作成者：坂本明美]

年に課題を提示する。ある学級では、「間接指導」時において、子どもたちは、各学年で決めた「学習リーダー」が同学年の子どもたちの授業を進め、板書も自分たちで行いながら、教師の「直接指導」がなくても、同学年の子どもたち同士で学び合っていた。

日本の複式授業において、筆者にとって特に興味深く思われたことは、国語や算数の複式授業の学年別指導では、同学年同士のかかわり合い、学び合いはみられるものの、異学年同士が相互にかかわり合って学び合う機会がほとんどなく、二つの学年の子どもたちが同じ一つの学級で学んでいても、両者の関係がほとんど切断されているということである。さらに、教師の授業方法によっても異なるが、筆者がこれまで参観させていただいた複式授業の中には、「間接指導」時において、教師が与えた課題を早く終えた子どもが、手持ち無沙汰になってしまう場面もたまにみられた。

このような我が国の一般的な複式授業と比較すると、「フレネ学校」における実践では、次のような違いがある。第一に、異学年同士のかかわり合いを重視していることである。「支援」のペアや座席の配置の仕掛けである。第二に、「学習材」が備わっていることである。フレネ学校では、一人ひとりの学習リズムやプロセス、個性も異なる、という異質性・多様性に基づき、「フレネ技術」と呼ばれる諸技術によって教育実践を展開している。そして、一人ひとりの学習リズムや、興味・関心に対応するための「学習材」が備わっている。このように、「フレネ学校」における実践では、「フレネ技術」と「学習材」が異質性・多様性に基づいた教育を支えている。

おわりに

ヴァンスのフレネ学校が 1991 年に国立学校になる時、フレネとエリーズがその設立時から築き上げてきたフレネ学校独自の教育を守り抜くことが、同校にとっての重要な課題であった。そして、フレネ学校において、教師たちの退職による世代交代を迎えた時、教育実践の継承という課題に直面することになった。新しく採用される教師が、採用前にフレネ学校において事前に研修を受けるという条件や、退職後のカルメンとブリジットの来校による定期的な指導助言を受けることなど、教師たちの養成に力を入れることによって、フレネ学校の教育実践を継承しようとしている。実際に、世代交代のただなかで教師たちの異動はあったが、2012 年 3 月の筆者の訪問時に、「フレネ技術」と呼ばれている諸技術と「学習材」をもとにした教育実践は

継承されていた。

また、筆者が 2007 年 3 月に訪問した時に実践されていた「支援」のペアや座席の配置の工夫など、異学年（異年齢）学級のメリットを活かした教育実践も、2012 年 3 月に継承されていた。これらの「支援」のペアや座席の配置を通して、フレネ学校では異質性に基づいた教育を追究していることがわかる。異学年が混合した学級において、日常的に異学年同士がかかわり合いながら学ぶ仕掛け・工夫がなされているといえる。実際には、「支援」のペア以外の異学年や同学年の子どもたち同士の自然なかかわり合い、助け合い、学び合いがさまざまな場面でみられた。

一方、フレネ学校では、異質性、多様性、個性とともに、「協同 (la coopération)」・「(学校) 共同体」という概念もキーワードとなっている。本稿で扱った資料【B】に、次のような文章がある。

「フレネ学校の教育 (*La pédagogie de l'école Freinet*) は、一人一人の子どもが、自分の属する集団 (la collectivité) を尊重しながら、自己の人格を築くことを支援する。

個人とグループとの間のこの均衡は、自由な表現と学校の協同のおかげで実現される。その自由な表現と学校の協同は、装置／仕組み (dispositifs) と、一貫性のある全体をなす諸技術との総体によって支えられる。もしも我々が、この教育において《自由な》面だけしか見ないのであれば、グループを犠牲にして、個人を称揚し優先するシステムにするであろう。それは、フレネの考えに反するものである。」【B】(p.9) [下線部は、原文ではイタリック体で強調されている。]

この引用文から、「個人とグループとの間」の「均衡」、個人と共同体との関係を結ぶもの、個性化と協同化とを融合するものが、「自由な表現」と「学校の協同」である、といえよう。

フレネ学校では、「支援」のペアや座席の配置という仕掛けだけではなく、「自由な表現」と「学校の協同」に基づく「フレネ技術」と、「学習材」を媒介とした教育実践によって、一人ひとりが互いに違いを認め合い尊重しながら、協同／協働していく関係を築いていくことを、追究し続けているのではないだろうか。

【注】

- 1 以下、各クラス [学級] について、フレネ学校で実際に使われているクラスの呼称、同校で通常基本的に構成員となる学年、本稿における呼び方、の順に記す。①「小さい子たちのクラス (Classe des Petits)」

：年少児，年中児，年長児→本稿では「幼児クラス」と呼ぶ。②「中くらいの子たちのクラス (Classe des Moyens)」：小学校第1・2学年→本稿では「低学年クラス」と呼ぶ。③「大きい子たちのクラス (Classe des Grandes)」：小学校第3・4・5学年→本稿では日本における学年と照合しやすくするために，便宜上，「中・高学年クラス」と呼ぶことにする。基本的には以上のような学年構成であるが，例えば，本稿で扱う2012年度は，小学校第3学年の子どもたちは二つのクラスに分けられ，一方は「低学年クラス」へ，もう一方は「中・高学年クラス」へ配置されていた。この2012年度のように変則的な年度もあるため，厳密に言えば，学年構成は毎年まったく同じというわけではない。

ただし，「フレネ教育」を導入している学級は，すべて異学年学級（異年齢学級）というわけではない。フランスに限定して言うならば，同じ一つの学年で学級が構成されている場合もあれば，複式学級，あるいは三つ以上の異学年が混合している学級，さらには1年生から5年生まで全学年の子どもたちが一つの学級で学んでいる単級学校の場合もあり，それぞれの教師が担任する学級の状況は多様である。

- 2 1947年に「現代学校協同研究所 (l'Institut Coopératif de l'École Moderne: l'ICEM)」が創られる。また，フランスだけではなく，国際的にも運動の輪が広がり，1957年には「現代学校運動国際連盟 (la Fédération Internationale des Mouvements d'École Moderne: la F. I. M. E. M.)」も組織されている。「現代学校運動」では，今も，教師たちがネットワークを築き，互いの実践を交流し合い，議論し合い，試行錯誤しながら実践に取り組み続けている。
- 3 資料【B】のp.13. 原文には「Simone Cense」と記載されているが，正しくは「Sence」である。
- 4 三人の女性教師たちの経歴については，主に下記の二つの資料を参照した。①「L'école Freinet de Vence, CONVENTION & CHARTE », École Freinet de Vence, 06140, 13 juillet 2009 / 7 mai 2010, Inspection Académique de Nice, p.8, p.13
②« Septembre 2009, Communiqué de l'école Freinet » <http://www.amisdefreinet.org/ecolefreinet/communique20091011.html> (2016年11月26日最終アクセス)
- 5 « Septembre 2009, Communiqué de l'école Freinet », op.cit.
- 6 フレネ学校の小学生のクラスにおける「自由テキスト」の実践では，まず子どもたちは皆に伝えたいこ

とを自由なテーマでノートに文章で書き，発表し合い，質問やコメントを交流し合う。そして，「自由テキスト」をもとに，書くこと，読むこと，文法などの学習を行う。例えば，筆者が2007年3月15日に中・高学年クラス（カルメン学級）で参観した実践では，「自由テキスト」の発表と交流後に，多数決で一つの「自由テキスト」を選び，その「自由テキスト」をクラスで協同的に推敲しながら，綴り，文法，類義語などの語彙も学習していた。

【引用文献】

- BARRÉ, Michel, 1988, *Célestin FREINET par lui-même*, PEMF
- BARRÉ, Michel, 1995, *Célestin FREINET, un éducateur pour notre temps ; Tome I , 1896-1936 Les années fondatrices*, PEMF
- « L'école Freinet de Vence, CONVENTION & CHARTE », École Freinet de Vence, 06140, 13 juillet 2009 / 7 mai 2010, Inspection Académique de Nice
- FREINET, Célestin, 1935, "L'Ecole Freinet à Vence (Alpes-Maritimes)", *Supplément à L'Éducateur Prolétaire*, No.18, 10 juin 1935
- GO, Henri Louis, 2015, "L'École Freinet a 80 ans !", *ICEM Pédagogie Freinet, Le Nouvel Educateur*, no.222 (Avril 2015), 50-51
- 長谷川京子, 1996, 「フレネ学校を見学して ―カルメン・ブリジット学級のひとこま―」『フレネ教育研究会会報』No.38/1996. 6. 18, 54-59
- 堀内達夫, 2010, 「フレネ学校のこれから―フレネ学校教師との会見」『フレネ教育研究会会報』No.95/2010. 5. 30, 42-44
- 坂本明美, 2008, 「フレネ学校における教育実践 ～「異年齢学級」に着目して～」『技術教室』2008年2月号, No.667, 産業教育研究連盟編集, 農山漁村文化協会発行, 54-59
- 若狭蔵之助, 1992, 「1991年のフレネ学校」『フレネ教育研究会会報』No.20/1992. 6. 25, 53-67
- « Septembre 2009, Communiqué de l'école Freinet » <http://www.amisdefreinet.org/ecolefreinet/communique20091011.html> (2016年11月26日 最終アクセス)
- 【謝辞】本研究はJSPS科研費（課題番号：23530980）の助成を受けたものです。なお，部分的に，JSPS科研費（課題番号：18830011）の助成を受けた内容も含まれています。